

山形新聞に掲載された荒木ひよこさんの主張に目が止まりました。

2019（令和元）年9月28日（土）開催の第58回山形県少年の主張大会——いま伝えたい私のメッセージ（主催＝山形新聞、山形放送、県防犯協会連合会、県青少年育成県民会議）が山形市の山形国際交流プラザで開かれ、翌月10月6日（日）付に入賞者5人の主張が紹介され、その中で優秀賞に輝いたのが戸沢村戸沢中3年の荒木さんです。

大いなる感銘を受けましたことから私の感想を記述して見ました。

荒木さんは、子供にも大人に対しても人生の有り方について明確な回答を示しています。図－1は抜粋ですが、最後段にある「・・・一人ひとりが違う、それこそが『普通』なのだ。違うことは当たり前だから、互いに認め合う努力をしていきたい・・・」 一字一句に無駄がありません、平易な言葉ですが、あり方の全てが凝縮されています、生き方指針のこれぞ象徴です、荒木さんのこの言葉に尽きます。私が常々思っていることとまったく同じです。触発されて沢山の思いが浮かんで来ましたが、その一端を記述して見ます。

え方など、同じ人は一人としていない。その中で、よりたくさんの方が選ぶものが、いわゆる「普通」なんだと思う。でも、みんなと同じものを選ばなかったら、私は「普通」じゃなくなるのだろうか。そう考えると不安になる。人によって「普通」の基準は違うから、変だと思われぬように、気を遣わないといけない。自分と違う考えを持つ人を「異常」と見なし、拒絶したり、差別したりする人もいる。私も、「ひよこが女の子かわいいうつ」と、なんか、気持ち悪い」と言われ、それ以来、言いたいことがあっても、理解してもらえないんじゃないかと、言葉を引っ込めてしまっている。でも、まうことがある。だけど、「違う」ことにおびえる社会は窮屈だ。私は、私にしかない自分らしさを大切にしたい。そしてそれと同じように、「普通」というあいまいな基準に振り回されず、目の前の人を理解しようとする姿勢を大切にしたい。

誰もが納得できる「普通」は存在しない。一人ひとりが違う、それこそが「普通」なのだ。違うことは当たり前だから、互いに認め合う努力をしていきたいと、私は思う。

その1；私が教育行政の最高責任者であれば、子供達に対しては、「元々人間はみな違う、個性の重み——性格、思考、価値観・・・を計量しようがないのだ、個性・人間性の優劣に順位を付けようが無いのだ」という大原則をきちんと認識・理解させます。その上で、そのことを前提としての学校・学業であるという基本を繰り返し徹底的に指導・叫んで行きます。義務教育の小中学校で10科目前後を勉強した、あるいは高校、専門学校、大学に就学したとしても地球規模の文化・文明からすれば、砂粒ほどの極めて限定的、極小的です。人間社会は、政治・経済体制を問わず、人間の能力の優劣を比較するために、様々なレベル（階層）において、テスト・試験・人事評価などのあらゆる手法を駆使し選別し、能力開発競争を強いています。しかもそれは特別の目的を以てする評価手法で、対象とする人間性・人間力の一部分を（※1）切り取った部分評価に過ぎないのです。さらにそれらの評価手法は本来数えきれないほどの無数設定出来ます、評価対象項目も無数設定出来ます、しかしそのことをすっ飛ばして、たかが数十項目を以て、つまり、極小的部分評価を以て人間性全部を評価してしまうのです、その結果さえも（※2）相対評価なのに絶対評価と見做し、固定化してしまうのです、他人を「あなたはこうだと」レッテル貼りするので、これはとても恐ろしいことですが、現実の一面です。

（※1）切り取りとは、認知・認識の範囲は“有限（断片、局部、一面）”であるということです。

（※2）相対とは、二つ以上複数のもの・ことを向かい合わせてこそ、はじめて個々の存立意義が表れます、しかも、その意義すなわち価値は比べる要素が変われば変わります。例えば同じ対象に対しても、私にとって“好き”と思えるものが、相手からは“嫌い”と成り得ることを意々ます。相対は厄介な感情の比較を生みます。

繰り返すが、人は無限の可能性を秘めています、ひとりの個性（人間の力量、人格）は、重厚・深淵で計量しようが無く優劣を決めようがありません、なぜならば、無限の遠方はどこまで追いかけても掴みようがありません。しかも、その人間の現実の発現性、つまり「心（認識や精神）・言（言葉や言語）・行（行動や活動）」はその人間力の一部をいつとき一時表現しているに過ぎません。ノーベル賞を受賞したからといって、オリンピックで金メダルを取ったからといって、東京大学を首席で卒業したからといって、そのことは、その人の人間力（能力）の断片に過ぎないのです。対人関係においては、相手に対する見方は対象物（相手）の一部分を一方的にこちらの主観を以て切り取り、その時の表層的な印象を、感情を以て表しているに過ぎません、相手に対する刹那の感情を以て全部を把握したが如く錯覚・倒覚している場合が大半です。そして、周囲環境への対応に着目して見ます。地球、宇宙について究明されていないことは山ほどあります、よって解明されたのは本の一部です。人間が能動的に係ったとしてもそれら対象の観方や観られ方は、どっちにしても無限大に対して、有限の局部、断片に過ぎません。他者との価値・値打ちは比べようがありません、比較するためには基準が必要だが、それを設定しようがない、何か一つ決めたとしても無限大の決め方があり、結果して比べようがないのです。

その2；そして、荒木さんのおっしゃられる「基準」のこと、それぞれの「基準」は千差万別です、人間は自分の意見・考え方について、言葉を以て表現する時に、無意識の中に善悪・正邪等の二元対比を以て判別し、二者択一しているが、その振り分けの拠り所が自分の「基準」です。「価値観」という言葉に置き換えてもいいと思います。一人ひとりの「基準」も価値観も無限に設定可能、量りようがありません。

取り巻く環境^㉑も人間^㉒もそれぞれが無限大（ ∞ ）であるから、対象とするボリュームは $\text{㉑} \times \text{㉒} = \infty \times \infty = \infty$ です、人間一人が感知・認知出来ない大きさです。そこ（無限大の環境・人間）から何かを切り取って認識・評価し価値を与えたからといっても所詮は有限です。 $\text{㉑} \times \text{㉒} = \text{有限} \times \text{有限} = \text{有限}$ です。この有限も無限まで広がっています、切り取る有限はかつ相対的なものなので、どちらかの有限はゼロの可能性もあります。有限 $\times$ ゼロ＝ゼロです、全部と思った断片の価値は意味をなさないということです。この地球上の何事も、60億人が集まって人類最高位の論理・理屈を振りかざしても100%解かれることは無いのです。

端的に言うと、人間は、無限性の全てのもの・ことから、一人ひとりが勝手にある部分を切り取って、つまり、無限から有限（断片）を取り出して、対峙している関係にあります。断片採取は一方で対立を生みますが、他方では対人関係においては「一人ひとりが違う」となります。切り取った部分の集積・累積を以て一人の人間性を形成し、個性と呼ばれます。かつ、どこをどのように切り取るのか、切り取り方はその人しか分からない、どこまでいっても、把握出来ない、相手の人間の力量が見えて来ない、それこそが自分と相手が「違う」からなのです。これはお互い様なのです。

なお、中には“俺はお前のことは全部分かる”と豪語する人がいるが、^{しっこく}桎梏状檻籠り、^{おりごも}金網ネット包囲リング内での一人相撲」の人間なので、相手にしてはならないのです。

このようなことを要約したのが、荒木さんのおっしゃる「一人ひとりが違う、それこそが『普通』なのだ。違うことは当たり前だ・・・」ということだと私は理解しています。

以下、荒木さんのご意見がトリガーとなって誘発・派生した思いを関連として記述します。

《関連－１》子供は大人を真似る

図－**2**にあるとおりの保護者（大人・親）の相手対戦チームへの罵倒（きたない言葉でののしる）行為は、そのまま子供達へ生き写し（コピー）されて行きます。おそらく周囲の子供達も保護者達を真似て発声したと推測されます。様々な試合・競技の中で、野球はその一面、試合とは部分の競技なのだとすることを普段から理解していない証拠です。そのような人達には今更スポーツマンシップ云々はまったく通用しません。こんな卑劣な罵倒行為者は、即刻退場させるべきです。そのような保護者達は、自分が小さい頃から大人社会のふるまいをつぶさに観察して来た“物真似”なのです。大人（親・教育関係者・・・）→子供→大人の連鎖の悪循環スパイラル事象の一端です。小さい頃から「人間は一人ひとりが違うのだ、競争やテストは一定条件化の、

一つのルールのもとでの一過性の出来事なのだ、相手があつての競い合いなのだ、相手が無ければこちら

野球部 これからも応援

■ 遊佐町 斎藤歩 43歳

私の息子は4月から遊佐中学生になりました。テニス、サッカー、野球と体験入部をした後、親友からの「自分が一番入部したい部に決めた方がよいよ」というアドバイスを受け、野球部に決めました。

ゴールデンウィーク期間中に、会長杯野球大会が酒田市光ヶ丘球場で開かれました。遊佐中対他校の対戦が3試合ありましたが、他校の保護者の応援で、対戦校の遊佐中野球部員を罵倒する場面が多々ありました。過熱した保護者の応援は対戦校の部員を傷つけるものです。そのような応援は必要ありません。スポーツでは必ず実力ある者が勝利を収めるのです。保護者の皆さま、対戦校に敬意を

2019 (R元)
6/12 (水)
山形新聞

図－2

持ち、品位・品格ある応援をしていただくよう、よろしく願っています。

遊佐中野球部員は野球を愛し、純粋にひたむきに日々の練習を頑張っています。その結果、大会では3位という輝かしい成績を収めることができました。

遊佐中野球部は、皆、心優しく、礼儀正しく、感謝することを忘れないとても立派な子供たちばかりです。そのような立派な野球部員を育て、ご指導いただいております小松秀先生、いつもお世話になり、ご尽力いただき、本当にありがとうございます。

が無いのだ、絶対に罵倒を浴びせてはならないのだ。」という精神を徹底的に教え込まなければならないのです。そして、「その時が過ぎ・その場所を離れ・その場面が終わればノーサイドなのだ」ときちんと繰り返し教えるべきなのです。子は親を選ぶことは出来ません、親はみな違います。同じ親の下での兄弟姉妹でさえ、一卵性双生児でさえ、育ち方が違います。偶然と必然が相まって誕生した人間は皆みな違います、心も体（姿形）も絶対に同じにならない宿命にあります。大人も子供達も今の姿は、過去からの因縁の累積の丸ごと結果です、過去のプロセスの有り様は無限です、よってみなバラバラ、違って当たり前です。

《関連－２》「打って反省、打たれて感謝」

剣道の全てを表しているという言葉です。私は剣道はまったく知りませんが、なるほどと思える短いフレーズに感動します。「打って反省」の訓えは、今回は相手を負かしたが、相手はどこか体調が悪かったかもしれない、また、勝ったものの本当に正しい心と型で打ち込めたのか、よって、今回はたまたま勝てたのだ、という心を、つまり、勝っても謙虚に省みて、勝ちに慢心することなく更に精進せよという意味合いです。「打たれて感謝」は、私が負けたからには、どこが弱点で何が原因だったのだろうか、どこに隙があったのだろうか、と気付かせて貰った。反省させてくれた相手に感謝し、次は負けないように研鑽に励めという意味合いです。心身の鍛練とか、自己修練とかの絶えざる自己修養の大切さを訓える言葉です。

《関連－３》みんなちがって、みんないい。

大正時代末期から昭和時代初期にかけて活躍した日本の童謡詩人“金子みすゞ”さんの詩の中で 私が大好きな「私と小鳥と鈴と」という詩を載せておきます。

私が両手をひろげても、 お空はちっとも飛べないが、
飛べる小鳥は私のやうに、 地面を速くは走れない。
私がからだをゆすっても、 きれいな音は出ないけど、
あの鳴る鈴は私のやうに、 たくさんな唄は知らないよ。
鈴と、小鳥と、それから私、 みんなちがって、みんないい。

=====

子供達のみならず大人の社会教育においても、剣道の精神とか、金子みすゞの言葉を啓蒙啓発していく社会であって欲しいと念じています。

(end)